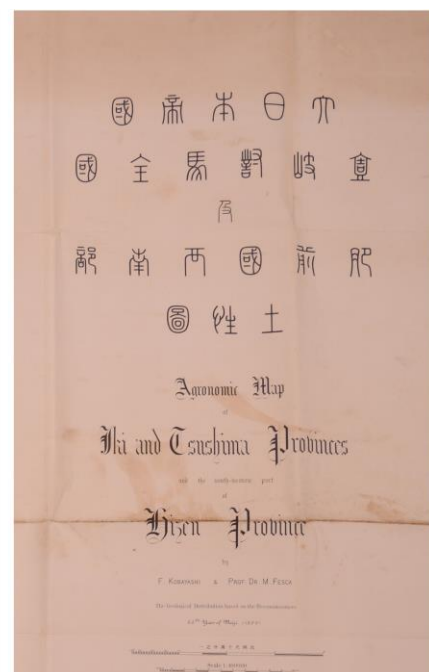


大学史資料室通信

農大
第15号
2020.11.1



『大日本帝国豊前国対馬全国及肥前国西南部土性図』（*） 小林房次郎

東京農業大学の人々（一〇）

―「本邦に於ける加里の父」小林房次郎―

本学初代学長であつた横井時敬は、育英黌農業科が東京農学校として独立した後の教頭について、「沢村（真）博士は我が校の独立後、最初の教頭であつたが、間もなく職を辞し、豊永（真理）農学士がその後をついだが、これまた久しく止まること出来ないで、その職を長岡（宗好）農学士に譲つた。かようにして教頭の地位がしばしば動揺したというのは、我が教頭に戴いた諸氏は、皆そうそうたる農学者ばかりであつたから、それぞれ然るべき劇職に就かなくてはならないので、勢い我が教頭の任務に服することができなかった」からだと回想している。沢村真についてはこの連載の（七）で、またその後任の長岡宗好については同（四）で取り上げたが、長岡の後、前回取り上げた本多岩次郎、次いで今回の主人公である小林房次郎とめまぐるしく教頭が替わっている。

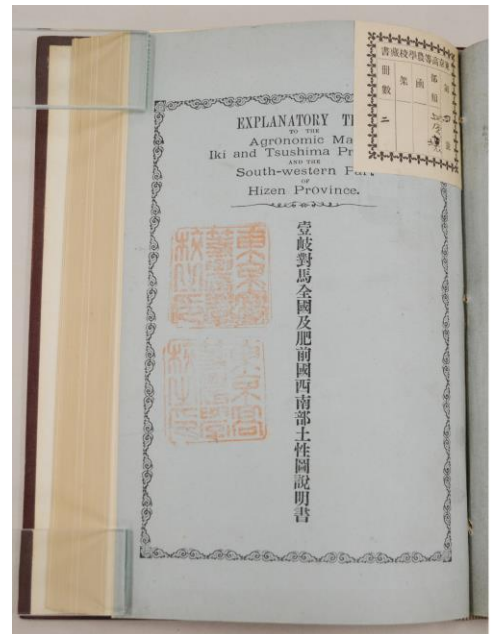
さて、横井時敬は駒場農学校卒業後、短期間の兵庫県勤務を経て、福岡県で八年間を過ごし、この間、日本近代農学の最初の成果と評価される種籾の塩水撰種法を發明した。この塩水撰種法に代表される横井の業績を高く

評価し、現在の農林水産省の前身に当たる農商務省に推薦したのはマックス・フェスカであった。当時フェスカをはじめとする政府の御雇ドイツ人農学者は日本農業に関する最高の権威であり、いずれも駒場農学校の教師であったが、フェスカの場合、駒場農学校教師は兼任で、本務は農商務省地質調査所における土性調査事業の指導であった。地質調査所では、フェスカの下、この連載の(三)で取り上げた恒藤規隆のほか、大内健、今井秀之助、渡部朔、青山元（いずれも横井時敬の駒場農学校同級生）、鴨下松次郎（明治一九年駒場卒）などが土性調査事業に従事していたが、明治二十一年、駒場を卒業し、メンバーに加わったのが、今回取り上げる小林房次郎である。



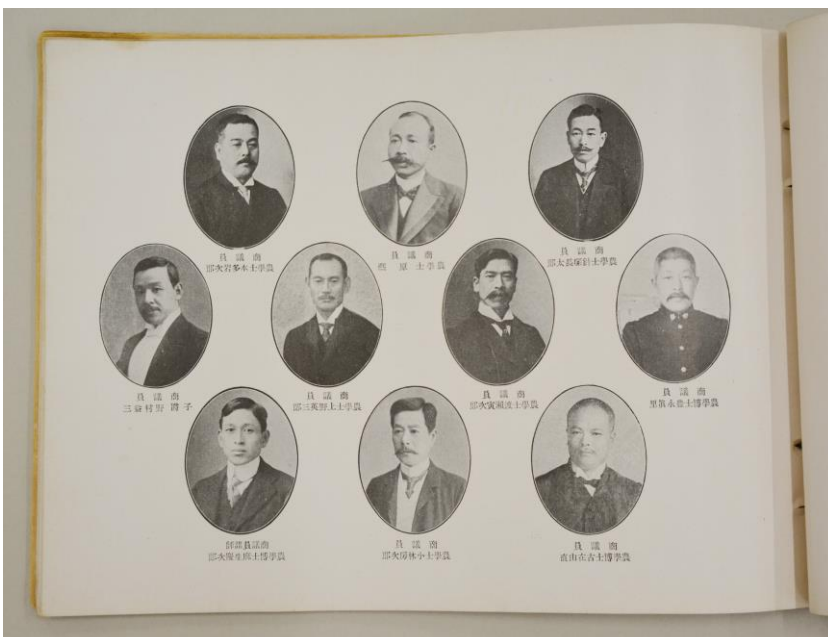
『東京農業大学 開校十五年記念帖』 (*)

小林房次郎は、元治元年（一八六四）現在の広島県広島市に生まれ、広島英語学校等を経て駒場農学校に入学、明治二十一年（一八八八）七月、同校の後身である東京農林学校農学科を卒業した。同級生には前出の本多、長岡のほか、のちに宇都宮高等農林学校（現在の宇都宮大学農学部）初代校長となる佐藤義長などがいる。卒業後、農商務省地質局技手見習を経て、明治二十三年（一八九〇）同省地質調査所技師試補、次いで同技師となった。本学図書館大学史資料室が所蔵している『大日本帝国壱岐対馬全国及肥前国西南部土性図』『同説明書』（一八九四）は、この頃、小林が係わった土性調査の成果である。



『壱岐対馬全国及肥前国西南部土性図同説明書』 (*)

この間、明治二十九年（一八九六）三月、小林房次郎は、地質調査所に勤務しつつ、私立東京農学校の教頭に就任した。小林が教頭に就任した当時の東京農学校は、経営難の最中にあった。早くも同年一二月、経営主である榎本武揚は、経営に行き詰まり廃校を決意するに至る。横井時敬の尽力もあり、同校は大日本農会に譲渡されることになったが、この間、小林が教頭としてどのような動きをしていた

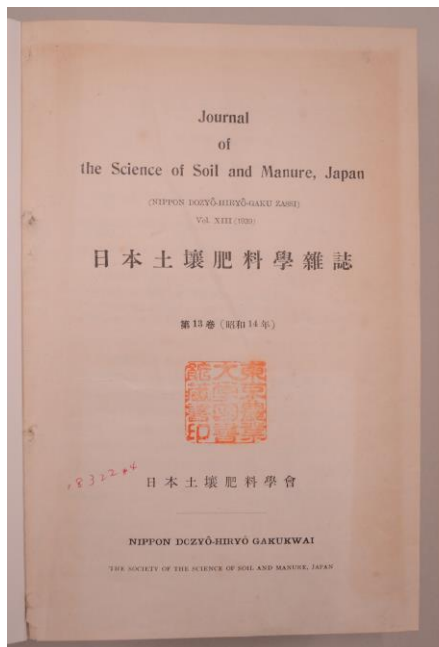


『東京農業大学 開校十五年記念帖』 (*)

のかは定かでない。翌三〇年（一八九七）一月、大日本農会附属東京農学校職制が制定され、小林は教頭の地位を横井に譲った。とは言え、小林は引き続き同校講師を継続し、さらに横井、豊永、長岡、本多、渡部、沢野淳「本連載（五）」、岡毅、渡瀬寅次郎「本連載（二）」、伊庭想太郎の九名とともに同校の商議員を委嘱された。東京農学校は、明治三四年（一九〇一）に大日本農会附属私立東京高等農学校、明治三六年（一九〇三）に専門学校令による大日本農会附属私立東京高等農学校、さらに明治四一年（一九〇八）大日本農会設立の私立東京高等農学校となるが、小林はこの間も引き続き同校の商議員を務めた。退任したのは、専門学校令による大日本農会設立の私立東京農科大学と改称した明治四四年（一九一一）一月であった。すなわち、一五年余りにわたって商議員として同校の経営に与ったことになり、その功績は看過できないものがある。

さて、本務である農商務省では、明治三四年（一九〇二）肥料礫物調査所が新設され、小林は地質調査所を本務とし、農務局技師兼任に合わせて肥料礫物調査所技師をも兼任することとなった。明治三六年（一九〇三）には、肥料礫物調査所の事務を農事試験場に移す勅令が出され、農事試験場技師兼任となった。

同三八年（一九〇五）には農事試験場本場に土性部が置かれ、農事試験場に籍を移した。また、この年、大韓帝国（旧韓国）の土性調査を命ぜられ、その成果は『韓国土地農産調査報告 京畿道・忠清道・江原道』として、農商務省から刊行された。



『日本土壤肥料学雑誌』第13巻（**）昭和14年、日本土壤肥料学会

大正二年（一九一三）五月、ドイツ加里シンジケートが日本農業部を置くことになり、農事試験場に適任者の推薦を依頼、古在由直場長は小林を推薦した。小林はカリ肥料の研究に従事することを選んで決意し、官を辞し、日本農業部に入った。その後、昭和五年（一九三〇）、ドイツ加里シンジケート日本農業部の事業を継承して、大日本加里株式会社が設立されると、小林は農業部の部長に就任し、昭和一二年（一九三七）に第一線を退き、同社顧問となるまで、カリ肥料の普及に尽力した。「本邦に於ける加里の父」（『日本土壤肥料学雑誌』第一三巻第六号「一九三九」所収の追悼文より）と呼ばれる所以である。なお、この間、大正八年（一九一九）七月、博士会推薦により小林房次郎に農学博士の学位が授与されている。ちなみに、この時同時に、かつて札幌農学校教師を務めたブルックスや、駒場農学校教師を務めたキンチにも農学博士の学位が授与された。

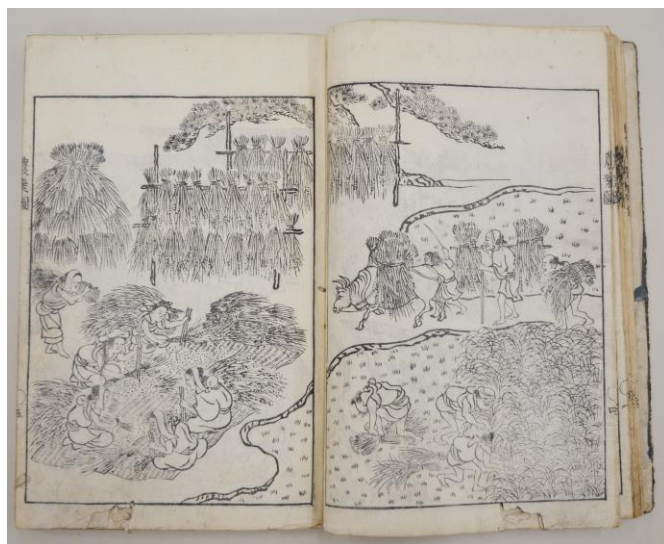
小林はこの他にも、東京帝国大学（現在の東京大学）農学部講師、東京高等蚕糸学校（現在の東京農工大学工学部）講師、日本土壤肥料学会の顧問なども務めたが、昭和一四年（一九三九）六月二日に逝去した。従四位勲四等、享年七五であった。

国際食農科学科教授

友田清彦

内務省蔵版『独逸農事図解』三〇葉・附録一葉
— 明治初期勸農政策の象徴 —

かつては普通に行われていた馬耕、つまり馬に犁を引かせて田圃を耕す作業がどんなものであったかを直感的に理解するためには、文字資料よりも絵画資料の方がはるかに優っている。宮崎安貞の『農業全書』の本文巻頭に掲載されている「農事図」などを見ると、当時



『農業全書』(*) 「農事図」



『大日本物産図会』(*) 「甲斐國葡萄培養図」

の稲作の様子が生き生きと伝わってくる。そんなこともあって、徳川時代には、文字資料としての農書とともに、絵画資料としての絵農書も少なからず著された。

同様に、江戸時代末期から明治初期にかけても、さまざまな生業を浮世絵などの絵画で描いた作品が多く出版されている。三代歌川広重の『大日本物産図会』などはその代表である。また、美しい女性たちが蚕を飼ったりする姿を描いた蚕織錦絵と呼ばれる浮世絵も多数出版されたが、これは実際の養蚕風景を

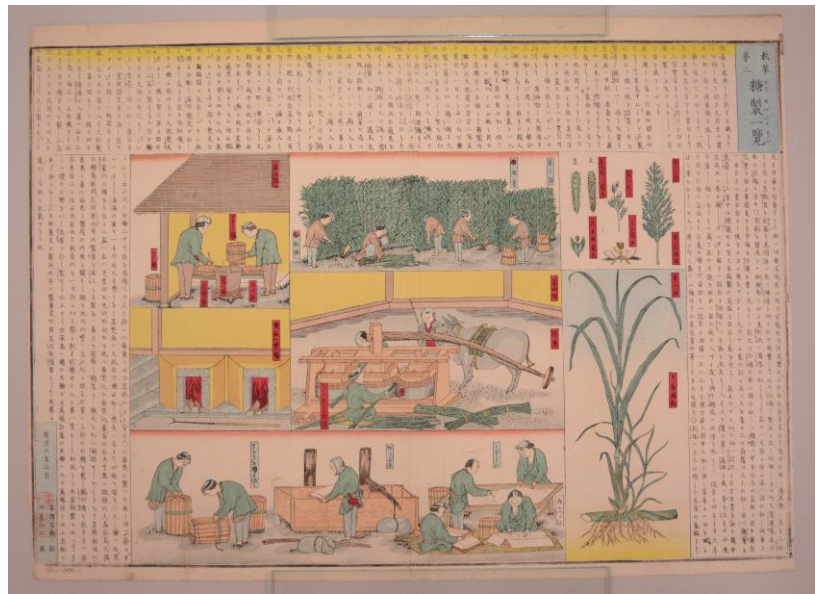
描いたというよりも、養蚕作業に託した美人画の一種と見た方が良いであろう。

教育・啓蒙的な目的の錦絵も刊行された。

「幼童家庭の教育を助くる為め」に、文部省が明治六年（一八七三）に刊行した錦絵は、一般に教育錦絵と言われ、その中にも稲作や養蚕、茶業関係のものなどがある。

こうした一連の絵画資料の中でも、本稿で紹介したい『独逸農事図解』と深い関係にあるのが、明治五年（一八七二）から同九年にかけて、当時の国立の博物館が編纂・刊行した『教草』（おしえぐさ）である。どのような関係かという点、田中芳男という人物、および澳国博覧会（ウィーン万国博覧会）との関係である。田中芳男という人物などと、以て回った言い方をしたが、本学の関係者であれば知っている方も多いと思われる、本学の前身・東京高等農学校の初代校長を務めたのが田中芳男であり、ウィーン万国博覧会はその田中が明治政府の事務官として運営に携わった万国博覧会であった。なお、田中芳男の簡単な略歴と業績については、筆者がすでに本誌創刊号および第一〇号で紹介しているので、ここでは省略する。

さて、『教草』というのは、田中芳男によれば、「嚮に明治六年、澳国博覧会出品の際に乘じ、各種職業の教草を編成せしめ画図を加へ、



『教草』(*)「第二 製糖一覽」

それでは、この『教草』と、これから紹介しようとする『独逸農事図解』との間には、どのような関係があるのだろうか。内務省蔵版の『独逸農事図解』三〇葉・附録一葉は、『教草』とその体裁が良く似ているのだが、それ以上に興味深いことが、『独逸農事図解』各図の序文に当たる部分に書かれている。やや長文になるが、以下にその全文を引用しておく。

此図解の原版は田中芳男が嚮に澳国博覧会より齎らし帰りて我勸業寮に納めた

るものにして蓋独国農業の要大抵載せて漏すことなし其の説明確用意周密殊に画図の精巧完備なるに至ては大に看者の想像を切実ならしむ故に各般の事業も容易くこれを实地に施すことを得へし洵に農家の標準といふへし官因て急に刊布を謀り蘭人ファンカステールをしてこれを訳せしむ余等随つてこれを校閲し務めて字数を省き要領を節収し又傍に俚訓を施こし以て農家子弟輩の誦読に便ならしむ

物名病名度量衡等原訳未詳かならざるものは姑く疑を存して他日の校正に付す
明治八年九月

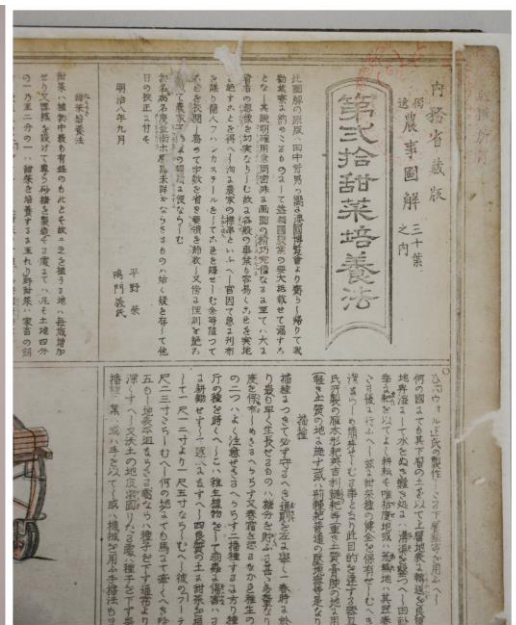
平野 榮

鳴門義民

すなわち、『教草』と『独逸農事図解』の成立には、いずれも田中芳男とウィーン万国博覧会が大きくかわっていたということが、よく理解できる。『教草』は、万国博覧会という機会を通じて、日本の様々な生業を世界に伝えるために田中芳男が中心となって編纂され、『独逸農事図解』は逆に西洋の農業について、日本人に知らせるために、田中芳男が入手して日本に持ち帰り、内務省勸業寮、のち同省勸農局から摘訳刊行したものなのである。

当時は、米欧回覧から帰国した岩倉使節団副使・大久保利通のイニシアティブによって、内務省が設立されて間もない時代であった。内務省には、最重要な一等寮として勸業寮が置かれ、殖産興業政策が展開された。当時の勸農政策もそのような殖産興業政策の一環と位置づけられた。そこでは、「輸入防遏・輸出振興」を主要な政策課題とし、官営主導型・西洋農業直輸入型の勸農政策が推し進められた。原野開墾と西洋式大農法の移植などは、その典型である。具体例を挙げれば、現在の成田空港のあたりに官営の下総牧羊場を開き、大規模な牧羊経営を行って原毛を生産し、これも官営の千住製絨所で毛織物に加工、自給体制を整えることで、当時の輸入品の大きな割合を占めていた毛織物の輸入代替を実現

以て童蒙に供」しようとしたもので、ウィーン万国博覧会に日本が参加した際に、各府県から提出された出品物の図説をもとに編成され、当時の文部省博物館（東京国立博物館の前身）から刊行された。「第一 稲米一覽」に始まり、「第二 製糖一覽」、「第三 養蚕一覽」と続き、「第三十四 草木移植心得」で終わっている。体裁は、それぞれ木版色刷りの一枚摺（約三八×約五〇cm）で、ほぼ中央部に図版が描かれ、図を囲むように説明文が配置されている。



『独逸農事図解』(*)「第貳拾 甜菜培養法」

しようとしたのであった。『独逸農事図解』は、このような明治初期における勸農政策の象徴と言える。

ただし、明治初期においては、西洋農業・農学と言っても、イギリスが中心で、東京大学農学部的前身、駒場農学校においても初代の教師陣はすべてイギリス人であり、西洋の翻訳農書も圧倒的にイギリス農書が中心であった。駒場農学校の教師たちが、イギリス人からドイツ人へと代わったのは明治一〇年代の半ばであるから、『独逸農事図解』が明治一桁代に紹介されていることは、やや時代に先行していると言える。

さて、『独逸農事図解』の体裁は、木版色刷りの一枚摺で、ほぼ中央に図版が入り、それを囲んで説明文が配置されている点は『教草』と共通しているが、一葉の大きさは約五四×七〇cmで、『教草』より一回り大きい。欄外の左下には発売書肆として、「東京南伝馬町二丁目十三番地 有隣堂 穴山篤太郎」と記されている。有隣堂は、今の有隣堂とは別物で、当時は最も有力な出版社として、多くの農業書も刊行している。のちに発展する博文館に相当するような出版社と言えるか。

全三〇葉・附録一葉の内容は、以下の通りである。

第一	菓樹栽培法
第二	葡萄栽培法
第三	葡萄酒管理法
第四	糞培法
第五	退水法
第六	牧場灌水法
第七	蜜蜂養法
第八	蔬菜類耕種法
第九	葎草培養法
第十	養蚕法
第十一	魚類蕃殖法
第十二	樹林栽植法
第十三	材木伐採法
第十四	田圃耕作法
第十五	牧牛法
第十六	牧牛利用法
第十七	菓樹施工法
第十八	煙草種芸法
第十九	亜麻種収法
第二十	甜菜培養法
第二十一	阿利襪栽培法
第二十二	庖厨料理法
第二十三	牧馬法 上
第二十四	牧馬法 下
第二十五	養豚法
第二十六	家禽養法 上
第二十七	家禽養法 下

第廿八 牧羊法

第廿九 耕作林木利害諸鳥説 上

第三十 耕作林木利害諸鳥説 下

附録 接木並器具

先に引用した『独逸農事図解』の序文によれば、おそらく独文の図解の文章を、オランダ人のファン・カステールが蘭文（あるいは英文か？）に翻訳し、それを平野榮と鳴門義民の二人が和訳、校閲、摘要したと読み取ることができる。そこで、次にこの平野榮と鳴門義民がどのような人物であったかを紹介したい。

まず、平野榮である。平野は、今治藩医で国学者でもあった半井梧庵の三男として、嘉永三年（一八五〇）一月に生まれた。明治三年（一八七〇）、今治藩権大属に任ぜられたが、翌四年には同職を免ぜられている。愛媛県教育会今治部会編『今治郷土人物誌』（一九三二）には、「明治の初年、『かながき新聞』に従事」と記されているが、それはこのころのことであろう。

明治七年（一八七四）、平野は、内務省勸業寮九等出仕となり、ここから政府の勸農政策に携わるようになった。同一〇年（一八七七）勸業寮が廃止され、勸農局に変わると、内務三等属となり勸農局事務取扱を申し付けら



『第三回内國勸業博覧會 其會場一覽全圖』 (*)

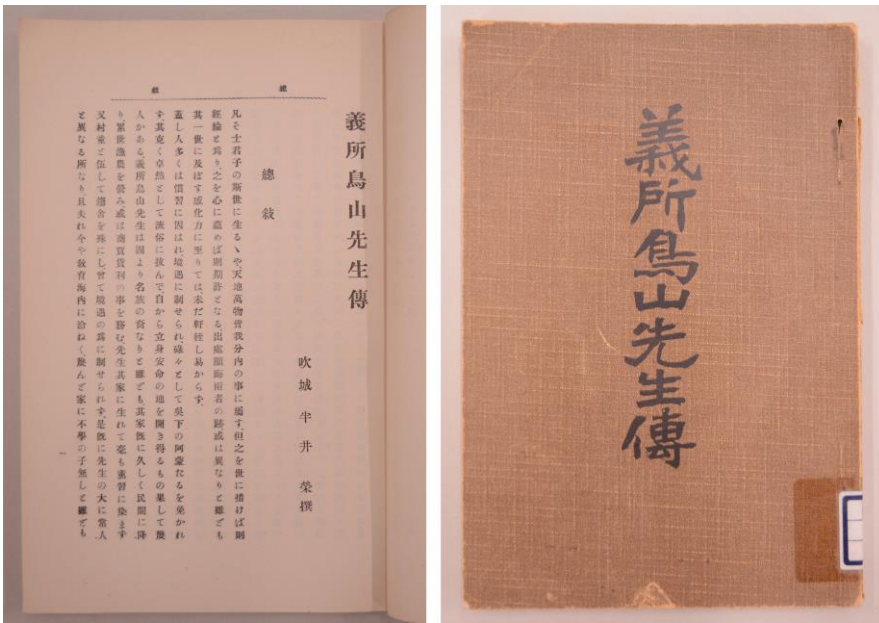
半井は蚕茶課長として蚕病試験研究を提唱、蚕病試験場が設置されることになった。この蚕病試験場は、のちに発展して東京高等蚕糸学校となり、現在の東京農工大学工学部へと成長していく。

やがて、退官、その後さらに富山県、石川県の勸業課長、また石川県珠洲郡長となり、明治二五・六年頃まで地方官を歴任している。明治三四年（一九〇一）頃、『鹿児島実業新聞』創刊の際に、聘せられて主筆となったが、約四年で退社、その後は没年に至るまで雑誌『蚕業新報』に寄稿し、蚕業界で活躍した。この間、第一回から第五回までの内国勸業博覧会のすべてで審査官をつとめ、また織物などにかかわる地方在来産業者の全国組織である五二会の審査も囑託されている。永年の功勞により藍綬褒章を授与されたが、大正一四年（一九二五）一月、東京で没した。行年七六歳。半井榮補訂『柞蚕飼養実驗録』（一八八四）、半井榮撰『義所鳥山先生伝』（一九二三）などの業績がある。

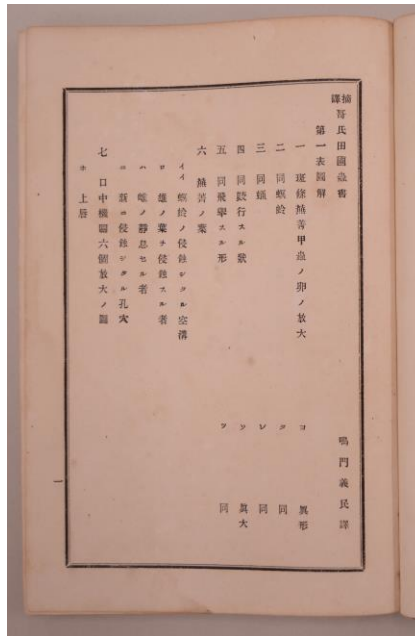
次に鳴門義民である。鳴門義民は、天保六年（一八三五）七月、阿波国美馬郡重清村東原に、佐々治藤太の次男として生まれた。姓を鳴門に改め、江戸・芝浜松町の大木忠益、のちの坪井為春に入門し、蘭学を学んだ。万延元年（一八六〇）からは、ヘボンら米人教師につ

いて英学を学び、文久二年（一八六二）、神奈川奉行所附下番、さらに慶応二年（一八六六）、通弁并翻訳御用出仕となった。明治維新後、明治二年（一八六九）、芝露月町に英学鳴門塾を開き、福沢諭吉の慶應義塾に次ぐ生徒数を誇った。

他方、明治四年（一八七一）、大蔵省勸農寮に出仕、権中属となった。その後、大蔵省租税寮中属を経て、明治七年（一八七四）、内務省



『義所鳥山先生伝』（**）大正2年、半井栄著、鳥山先生表彰会



『哥氏田圃虫書』（**）明治15年、有隣堂

この五二八頁、一六カラー図版の大著を、鳴門が摘訳したのが『哥氏田圃虫書』である。「哥氏」とはカーティスを指す。大正二年（一九一三）十一月、没。青山霊園に葬られた。一方は蚕、もう一方は螟虫などの害虫という違いはあるが、平野榮・鳴門義民の二人が、『独逸農事図解』のあと、いずれも虫と深くかわる生涯を送ったことには、なぜか不思議な縁を感じる。

国際食農科学科教授 友田清彦

本文中で*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。
本文中で**印の付いている資料は当大学図書館の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話… 03-5477-2526

FAX… 03-5477-2546